
緋弾のアリア 抜けば玉散る氷の刃

Libra

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 抜けば玉散る氷の刃

【Nコード】

N1551BA

【作者名】

Libra

【あらすじ】

「君にはコミュニケーション能力が不足していると思うんだ」
その言葉とともに潜水艦住まいから日本に飛ばされた私。え？なんで？なぜ？逃げる暇もなく催涙ガスで昏倒させられた私は学校に入学することになりました。

これは『イ・ウー』に所属する一人の、長期任務の物語である。

ブローグ

くくくくく

「おが？」

携帯電話のアラーム機能で目が覚めました。曲は某奇妙な物語の『ガラモン・ソング』です。

むくりと布団から起き上がり、壁の時計を確認。現在6時、時間通り。

今日も百獣の王のヘアースタイルになつて髪を整えて洗顔をします。

寝巻きを脱ぎ捨て、先日新調した着物を着込み、愛刀を腰に差す。髪はストレートに腰まで伸ばして、薄く化粧をするのも忘れません。

古い慣習なので理解はできませんが、ウチの一族には『成人するまで女装をする』という伝統があります。

いや、諜報活動とかには役立つ技術スキルなので使ってはいますけど。口調も見た目に合わせて丁寧語です。

余談ですが、これは父もやっていましたことです。父は地味な文学少女、祖父は大和撫子をイメージして女装していたのだとか。

「今日は和食の気分です」

自室に備え付けられた台所（この住居では私の部屋にしかありません）を使ってレックッキング。

無難に味噌汁と昨日の残りの白米を――

リリリン。

む、玄関の呼び鈴？こんな朝早くに誰か来たのでしょうか？

訝しみながら玄関の扉を開けると、ここの大家さんがいました。

早朝だというのにパリッとコートを着こなし、古風なパイプを銜えた青年です。

「あれ？どうしたんですか？何か御用でも？」

「いや、今日は朝食と一緒にどうかと思ってね。君の作る食事は実に美味だ。ご一緒しても？」

「……朝飯を集りに来やがったんですか？」

「ハッハッハ」

笑いながら大家さんは部屋に上がりこみ、そのまま室内に――

「待ちやがってください」

「ん？ああ、そういえば土足厳禁だったね」

その場で靴を脱ぎ、大家さんは今度こそ室内に入っていきます。

本来、ここの住居は洋室の造りであつたため靴を脱ぐ必要はありません。

しかし、それがどうしても嫌だった私はカーペットを取り除き、無理やりに畳などを運び込んで和室にしております。ドア？もちろん

襖ですが？

勝手知ったると言わんばかりに部屋に入ってきた大家さんは、そのまま私愛用の卓袱台に腰掛けました。

「……大家さん。いい加減にしないと『斬ります』よ?。」

この英国人、ブリティッシュわざわざ世界一料理が不味い国から日本を馬鹿にしにきたんでしょか？

刀に手をかけた私を見て、大家さんは「冗談さ」と言って床に座りました。

溜め息を吐きながら、食器棚から箸や椀などの食器を二人分取り出して卓袱台に並べます。

そして準備が終了したら、合掌して、

『いただきます』

私は朝日を浴びながらの食事が好きなのですが、この住居には窓がありません。よって、電灯の光のみでの食事です。

「そういえば、君がここに来てもう五年になるんだね。もうこの生活には慣れたかい?。」

「はい、問題ありません。時々誰かさんが食事を集りに来やがる以外は」

「そうか。それならば問題ないね」

私の皮肉を受け流しやがったよ、この若作り。

大家さんは私が食事を作り始めようとする時に現れます。そのため、「今日は量が足りなくて」という作戦は使えません。何でも、時間を推理してきているのだとか。世界最強の推理力をそんなことに使わないでくださいよ。

「私ももう12歳です。自分のことは自分でできます」

「普通、その歳の子供では到底無理だよ。自立することも、ここで生きていくことも」

確かに、ここは魔窟ですからね。変な人ばかりですし。

五年前、訳あって住む家がなくなった私は日本各地を放浪していました。

風の行くまま気の向くまま。西へ東へ南へ北へ。まあ、荒事などをして生活費を稼いでいたのです。

そんなある日、ここ——つまりは今の住居に來ないかという勧誘があったんです。

怪しかったんで首を刎ねましたけど。

その後も勧誘員の人が四人くらい來たのですが……まあ同じ末路にそうしたら大家さんが直々に勧誘に來たんですよ。

壮絶なバトルの末、重症を負わされた私は勧誘に応じました。

そして今に至るというわけです。

「それなら『家賃』をもつと安くしてください」

「それはできないよ。『働かざる者食うべからず』さ」

目の前で味噌汁を啜るこの人に言われると無性に腹が立ちます。

あまり金品のない私は、『家賃』ということで大家さんの仕事の手伝いをさせられます。

時にはアジアの北方にまで連れ出されたり、時には香港に連れ出されたり。

荒事になったら私を前に放り出すし。この前なんか本当に死ぬかと思いましたよ。

雑談をしながら食事を終えると、大家さんは帰っていきました。

さて、邪魔者は消えましたし、今日は部屋の掃除でもしましょうか♪

いぬづかみやび
犬塚雅、今年で12歳。

今日も部屋から一步もでないで安全に過ごしま——

ドシ—

玄関が何かの爆発で消え去りました。

「……………もつ、嫌」

私が住む『ボストーク号』は、今日も波乱に満ちています。

これは、私が犯罪結社『イ・ウー』で過ごした10年間を記す物語です。

プロローグ（後書き）

そんな感じで、緋弾のアリア始めました。

大抵のだと一巻の初めから開始になると、イ・ウー側の主人公という作品がないのを見て、「これは新しい方向からやってみたいな」と思って始めた所存です。

完結を目指していくので、どうぞよろしくお願いします。

第一話

「緊急の呼び出しですか？」

「そうだ。今すぐ来るようにと教授が仰っていた」

今日も部屋から出ないように引き籠もっていると、組織のメンバーであるジャンヌ・ダルクが来ました。

つていうか、平時から鎧姿ってどうなんですか？

でも、ここだとすぐにドンパチすることになりますからね。出歩くのにも武装が必要なのかも。

ジャンヌとは組織内でも仲が良く、こうして話をすることも多い貴重な人です。

『能力』の相性も良いですしね。何より誠実で、人の話をちゃんと聞いてくれます。

これがあの吸血娘とかエジプトマニアだったりしたら最悪ですよ。聞く聞かないではなく話が通じません。あの高笑いを聞くと思わず斬りたくなります。

「大家さんの呼び出しねえ。嫌な予感しかしません。よって行かないので」

「ま、待て！無視するのか！？」

「向こうが来やがれば良いですよ」

「それじゃ」と扉を閉めて鍵をかけようとすると、ジャンヌが必死

な顔で扉を掴んできました。

「頼む！お願いだから行ってくれ！お前が行かないと私が困る！」

「知りません。だいたい、どうしてあなたが困るんです？」

「私がイ・ウーで何と呼ばれているか知らないのか！『ミヤビ係り』だぞ！お前への苦情は全て私に来るんだ！」

え、何ですかそれ？ミヤビ係り？凄く不名誉なんですが。

「私は小学校で飼育されてるハムスターじゃないんですよ？そんな係りは必要です」

「しかしお前は滅多に部屋から出てこないだろう！他のメンバーとは会話すらしようとしない！」

「失礼な。ブラドとは仲が良いですよ？」

「ぐっ……だが、アイツは殆どここにはいないだろう！というか、なぜお前たちは仲が良いんだ！」

「そんなことを言われても」

優秀な血統を探しに世界中を飛び回っていますからなかなか会えませんが、私とブラドはとも仲が良いのです。気が合うというか。余談ですが、この前に連絡が来たときは……確か日本にいたと言っていました。

「とにかく！引き摺ってでも連れて行く！」

「あ〜れ〜」

本当に引き摺られました。

しかしジャンヌ、わかつているのですか？そんなことをしているから『ミヤビ係り』なんてものにさせられるのですよ？

そのまま大家さんの執務室に連れて行かれた私は、ようやくジャンヌに解放してもらえました。

プロフェシオン
「教授、連れて参りました」

「そうか。やはり君に任せて正解だったよ」

「いえ、私は当然のことをしたまでです」

嘔吐け、さっきは嫌がっていたくせに。

「それで、わざわざ呼び出して何ですか？朝食のバリエーションを増やせとかだったら殺しますよ？」

「ふむ、それはとても魅力的な提案」「斬ります」「冗談だ」

私が刀を抜こうとした瞬間、教授が真顔になりました。

これは真面目な話ですね。またどこかに連れて行かれるのでしょうか？

「君には、とある重要な任務をしてもらいたい」

「重要な任務ですか。誰かを殺すんですか？」

とうとう家賃の回収が来たようです。
もともと、私に回ってくる仕事といえば『殺し』かいらない『護衛』
です。

だって組織で最強のこの人に護衛なんていらないでしょ？
信じられないことに、護衛の仕事をしている私を戦場とかに置き去りにするんですこの人。

護衛〓新手の虐め、という方式が私の中では確立しています。

「いや、今回は違うよ」

「……？では破壊工作ですか？」

「それでもない」

まどろっこしいですね。さっさと話してくださいよ。
私は帰って寝たいんです。

「……………」

「ど、どうして黙るんですか？」

く、空気が重くなった！？もの凄いプレッシャーです！
重苦しい雰囲気放ってきました。い、いたい私に何をさせよう
と言つのですか！？

そして大家さんは、ゆっくりと口を開き、

「突然だが、君はコミュニケーション能力が不足していると思うんだ」

「斬ります」

私の手がぶれ、大家さんがその場を余裕の顔で屈むと——ザググググッ！！

次の瞬間、5メートルは離れている大家さんの背後の壁に、刀傷が刻まれました。その数、四つ。

「すばらしい。腕は鈍っていないようだね」

「ミヤビ!？」

感嘆する大家さん、反対に驚愕するジャンヌ。しかし、そのどちらもどうでもいいです。

この爺、今日こそ引導を渡してやります。

「大家さん、今までお世話になりました。家を提供してくださったご恩は忘れません」

「み、ミヤビ落ち着けえ!!」

ガバッとジャンヌが後ろから私にしがみ付き、半泣きで制止してきました。

「放しやがりなさいッ!この優男、頭から等分してやります!」

「頼む！やめてくれ！お願いだからやめてえええええ！」

ジャン又絶叫。私は怒髪天。大家さんは……なに笑ってやがるんですかコイツは！

羽交い絞めにされてもできる秘技を私が使おうとすると、

「いや、悪かったね。少し君を試させてもらった。これからやる任務に参加する資格があるかどうか」

「……資格？」

シリアスな雰囲気になったため、暴れるのをやめます。ジャン又は状況の変化に付いてこれずにまだ泣いています。

「う、うう、ぐすつ」

「ああゝもおゝ、ほらほらジャン又。もう大丈夫ですよ。喧嘩は終わりました」

「うう、ほ、本当？」

「本当ですって。大家さんと私は友達ですよ。怖くないですよ」

「……暴れないか？」

「暴れません」

「……嘘ではないな？」

「嘘じゃありません」

「……………わかった」

ようやく私から離れたジャンヌを、子供をあやすように話しながら頭を撫でます。

……ジャンヌの方が背が高いですけど。なんだか屈辱です。

「ジャンヌ。これから真剣な話をしますから、部屋の外で待って」
「嫌だ!」 「……………えええ」

なぜに即答!?

しかも、なんだか幼児退行してませんか?

「絶対に嫌だ! どうせ私が部屋を出たらまた暴れるんだ! 絶対に部屋を出ないぞ! 絶対だからな!」

「わ、わかりましたから放して〜!」

襟元を掴んでガクガクと揺さぶられた私は、とうとうOKを出しました。もうどうにでもなれ」

「……………それで、資格って何ですか?」

「ああ、私の推理によれば、数年後にイ・ウーに転機が訪れる」

「転機?」

「そう。詳しくは言えない。しかし極めて重要なことだ」

真剣に語る大家さんは、ふざけた様子が微塵もありません。

いつもこんなだったら良いんですけどねえ。

「それで、君には数年間の間イ・ウーを離れて生活してほしい」

「理由は……言えないんでしょうね」

「すまない。だが、いつかわかる日が必ず来る」

「……………」

別に転機とかそういうのはどうでもいいのですが、こつも真剣に頼まれると断りきれません。

この人には何だかんだでお世話になっていますし……。

「わかりました。その任務、引き受けます」

「ありがとう。そう言ってくれるとは思っていたが、実際に言われて安心したよ」

そう言つて、机の下からダンボール箱を取り出しました。

「これは何ですか？」

「新しい生活の拠点で必要になるものが纏めてある」

「必要になるもの？」

何でしょう？支給品？

少し期待しながらダンボールを開いた私は、それを見て完全に静止しました。

ジャンヌも目を丸くしています。

それは、どこかの学校の『女子制服』でした。

「ミヤビ君、君には神奈川武偵中に新入生として入学してもらおう。そこで存分にコミュニケーション能力を培ってきてくれたまえ」

「斬ります」

「嘔吐きイイイ！！！！」

その日、大家さんの執務室の壁は刀傷で一杯になりました。ついでに言っておくと、ジャンヌは胃痛と頭痛に悩まされるようになったらしいです。

第一話（後書き）

この作品、効果音が多すぎて書きにくいッ!!

第二話

「信じられません！武偵中に、しかも女子として入学しろだなんて！」

「だが、お前は普段から女装しているだろう？それと何か違うのか？」

「大違いです！私は女装をしているだけで女性として生きているわけではありません！」

これはあくまで一族の規則なのであって、趣味ではないのです。実際、私は性別を隠したりとかはしていません。

執務室を使い物にならなくした私は、大家さんにキツパリと任務を断ってから退出しました。

あの優男、次に妙なことを言い出したら今度こそ——！！

しかし、大家さんは私よりも一枚上手でした。

「な、何ですか！？これは！」

ジャンヌと別れ、部屋に戻った私が見たのは家具のなくなった我が家でした。

畳は全てはずされ、箆笥も卓袱台もありません。まるで引越しの後のような……。

「あれー？ワンちゃん知らないの？」

驚愕する私に声をかけてきたのは、同期の桜こと理子・峰・リュパン4世です。

それと、『ワンちゃん』と呼ぶのはやめなさい。犬塚の姓から取っているのはわかりますが不快です。

「し、しし、知らないとは……？」

「だってワンちゃんお引越しするんでしょ？教授から言われて部屋のもの運び出しちゃったんだけど」

お、大家あああああああ！！

貴様！あの挑発とか話の間とかは全部時間稼ぎですか！？
ってというか引越し作業速っ！？どれだけ急いで運んだんですか！

「に、荷物は！私の荷物は今どこに！？」

「さっき船外に出ちゃったけど？どこに送られたのかは理子も知りませーん」

「殺す！！」

「え、ちょ、何！？」

鬼の形相になった私にビビる理子を置いて、私は再び執務室に走り出しました。

後で理子に聞いたのですが、その時の私は奇声を上げながら刀を振り回していたらしいです。

「大家あ！！やっぱりあなたは今日ここで死——これは！？」

執務室に戻った私を出迎えたのは、部屋中に設置されたガス缶と、

「やあ、そろそろ来ると思っていたよ」

ガスマスク姿で微笑む大家さんでした。

——プシャアアアアア

途端、部屋に溢れる謎のガス。反射的に部屋を出ようとするが既に扉は閉まっていました。体当たりをしても開きません。施錠されている！？

「ぐ、がはごほ！こ、これは催涙ガスですか！？」

「その通りさ。君が戻ってくることは推理していた。ならば待ち伏せするのは容易いよ」

お、おのれえ！

気合一闪とばかりに刀に手をかけた私は、そのまま抜刀しました。

「我流犬塚流『渚^{なぎさ}』ッ！！」

——キン

私の抜刀は、傍から見れば手がぶれただけに見えるのでしょうか。目に見えぬ神速の抜刀、それがウチの一族の剣術の売りです。自分の死を理解するのは、残された鐸鳴りの音を聞いた時。

そして、この『渚』は刀の間合いという距離を飛び越える！！

なのに！

「ははは、その気概だけは買っておくよ」

斬られたはずの大家さんはピンピンしています。なぜなら、

「ば、パトラさんのゴレム……！」

砂礫となつて崩れる大家さんを見ながら、私は気を失いました。

後になつて考えたら、扉を閉めたのは大家さんの本体だったのですね。

「……………ハッ！？」

目を覚ますと、そこは見覚えのない洋室でした。

キヨロキヨロと周囲を見回しますがクローゼットと私が寝ていたベッド以外はほとんど何もありません。

ベッドに立てかけてあつた愛刀を腰に差し、いまいち使えませんが弾数だけを理由に持ち歩いているグロック18がちゃんと帯に挟んであるのを確認し、部屋からソロソロと出ました。

ガスの影響か未だにフラフラする頭を無理やり動かし、建物の中を進みます。これは……洋館でしょうか？しかもかなり大きいですね。

階段を発見した私は階下へと降り、他に人間がいなかどうかを確認しました。人が住んでいる気配はします。しかしどうも寂しいで

すね。

——トン

その時、木の床を踏む音を聞き取った私はダツとそちらに駆け出し、その男の首を刎ねようと——

「ま、待ってください！私です私！」

——したところで、それが誰なのかようやく気づきました。

「あれ？小夜鳴さんですか？」

そこにいたのは、ブラドの擬態——小夜鳴徹さんこよなみ とおるでした。

眼鏡に長髪に平日なのにスーツという組み合わせは忘れません。

「どうして小夜鳴さんがここに？むしろここはどこですか？」

「教授に聞いていないんですか？ここは横浜郊外にあるブラドの別荘の一つ——紅鳴館ですよ」

「よ、横浜あ！？」

私が気絶している間に日本に！？

「お、大家さんは何と言って私をここに送り込んだのですか？」

「それも聞いていないのですか？ここから武偵中に通いながら、ここで私と一緒に暮らすようにと」

.....

き、聞いてねえええええええ！何それ！？

あ！神奈川武偵高校付属中に行かせるのは初めからここに住ませるためだったんですね！

「し、知らなかったんですか？」

「……はい。武偵中に通うということしか……。ここに来る時も催涙ガスで無理やり」

「あ、あははは、そうだったんですか……。まあ、何はともあれこれからよろしく願いますよ。ちゅうど新しいハウスキーパーも欲しかったので」

こんな風にスマイルを振りまいていますが……小夜鳴さん、私に館の管理を任せる気満々ですね。

ああ、私の生涯引き籠もる計画が……。

数週間後、四月を迎えた日本は一斉に桜の開花が始まります。それと同時に入学、進級の時期になりました。

サイズがピッタリだった女子制服に若干怖気を覚えながらも、私は入学式の朝を迎えます。

「忘れ物は……ありませんね」

帯銃、帯剣の許可証を兼ねた生徒手帳、刀、銃、鞆、筆記用具……うん、大丈夫です。

入学初日から忘れ物など洒落になりませんからね。

私の学校デビューは完璧にしたいんです。ミスは許されません。

「似合っていますよ」と笑う小夜鳴さんにお礼のローキックを放ち、中学校に向かいました。電車通いです。

自宅通いの生徒はあまりいないのか、初通学にも関わらず生徒の数は思っていたよりも少なめでした。

寮に入っている生徒も多いらしく、大半はそっちなんでしょうね。

突然なのですが、私のように性別を偽って入学する生徒——通称

『^{チェンジ}転装生^{マスタース}』は毎年一人か二人はいるらしく、教務課に許可さえもら

えばその性別で入学できるのです。しかし転装生は通常中性的か異性的な少女がやることなので、傍から見ればそうだとは気づかれません。

なぜ私がそんなことを話し始めたのかというと、

「ふつ、緊張しなくても大丈夫だよ子猫ちゃん」

「……あ、あはは、それはどうも……」

入学初日にナンパされているからです。

私の学校デビュー、おわた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1551ba/>

緋弾のアリア 抜けば玉散る氷の刃

2012年1月5日02時45分発行